

いしました。ほんとうに助かりました。オカラをそのまま、岩塩をつぶしてかけて食べました。三月に入ってから、家中の人達が栄養失調と発疹チフスになり、けんめいに看病してなおり、最後に私がたおれてしまいました。ハルピンの大丸院長先生が、毎日強心剤とブドウ糖を注射して下さいました。十日間もこんこんと眠りつづけて、目をさました時は、骨と皮ばかり。毎日、主人とマサ子に助けられて、歩く練習をしました。七月、引揚船に乗り、一か月かかって舞鶴の港へ着きました。それから一か月、舞鶴病院で静養し、なつかしい故郷に帰ることになりました。

図們から新京、そして帰国へ

新潟県 羽賀 富 一

昭和二十年八月十三日昼過ぎ、ソ連のマークをつけた偵察機一機、図們市の上空を低空旋回した。夕食時、図們駅に勤めている友人から電話があり、満鉄職員の内

家族は明朝日本に帰還すると云う挨拶があった。

満鉄と国際運とは一体の関係にあり、満鉄は鉄路、国際運輸は陸路、積荷、荷降ろし、通関手続きその他これに附随するいっさいの業務についての代弁を業務としている関係上、帰還についてはあらかじめ打合せ済みであった。支店長へ電話。満鉄と更に協議の上疎開について同一行動をとることとなり、わが社は社員の一部と家族総勢二百五十余人を総務課長の私と前田労務課長が帰還責任者となって、八月十四日朝十時、図們駅出発と決定、青年隊員を非常召集してその旨を各家庭へ連絡、その準備に入った。

持ちものは、一人リュック一、手堤二つ、取りあえず、本社の所在地新京をめざすことにした。いざ出発という時に、憲兵隊から「満鉄と国際運輸がいち早く疎開するとは何事か」と文句をつけられる等のいきさつがあつて、予定の時間より遅れ、十四日夕刻八時頃、ようやく疎開列車に乗りこむことができた。翌十五日、敦化駅に着いたが、列車は動かない。敦化支店の社員がきて、今日正午ラジオで重大放送があるとのこと。

いちおう幹部のみ下車し、支店へ赴く。ちようど放送のなかばであった。終戦の詔勅、よく聞き取れない。

二十日満鉄疎開者とここで別れ、われわれは新京を目ざし、敦化駅を発つ。翌二十一日、吉林駅に着く。

駅頭には、すでにソ連軍が入城していて、列車が入るたびに土民がソ連旗を振って出迎えていた。吉林は交通の要衝であらゆる物資の集散地でもある。ここには国際運輸の支社もある。われわれはひとまず支社の寮に入り、新京へ向かう足がかりとしての情報を集めることにした。莫大な物資を取めた支社倉庫はソ連軍の手で封印され、ソ連軍の歩哨と巡警が昼夜の別なく厳重に見張っていた。

八月三十日、にわかには銃声が聞え、町中騒々しくなる。日本人の男刈りだとの流言があり、間もなくソ連兵や巡警に連行されて行く者が支社の二階、三階からもよく見える。さいわい、支社内はソ連軍の警備下にあるので、そのおそれはなかったが、支社の外に散宿していた人達は、素足のまま逃げこんできた。町は暴民が大挙して日本人住宅に押し入り、天井床下といわ

ず、隠匿した品物を捜し出し、白昼の百鬼夜行、分宿していた人達のうち支社へ戻らぬ者がいた。

ふと塀際を見ると、支社の総務課長が横になって死んでいた。このまま帰るに忍びない。誰かが塀の内から呼んだ。隙間から覗くと、吉野社員のすすけた顔が見えたので「早く今のうちに」と叫ぶ。彼の後から他の人達も入ってきた。その中に妻と娘もいた。後で聞くと、板の破れ目から家内と娘が塀の中へ入ろうとするとところを総務課長が板を引つ張ってくれ、中へ入れてくれた瞬間に課長が撃たれたとのことである。遺体は防空壕に埋葬されたとのこと、吉林を発つとき防空壕のお墓に深い祈りを捧げてお別れした、悲しい出会いと別れで、なんとも言いようのない宿命を感じたが、命ある限り、氏の御恩を忘れることはできない。

たくさんの穀類を隣の倉庫に持ちながら、われわれは飢えていた。逆らうなど我慢したが、毎日毎夜マダムダバイ（婦人をだせ）と巡警を先導にソ連兵が来る。若い婦人は髪を切り、男装したり、あるいは他人の子供を借り、添い寝をしたりする。

今日を生きのびても、明日の保証は誰にも無い。こんな所にいつまでもいても自滅を待つばかり、新京方面のほうで治安がよいとのこと、相談の結果、一日も早く新京へ脱出しようとして、まず(一) 吉林駅ソ連司令官の買収(二) いかにして吉林駅まで団体を導くかを協議(一)については幹部全員吉林駅にソ連軍司令官を訪ね、没収を免がれた腕時計を出し合って提供しOKをとり乗車の日時を確約した(二)については巡警数十人を雇うことにし、二百五十数人を四列縦隊として子供を中の列に入れ、巡警を両側五十メートル間隔に配し、警備することです了解を得た。

当日は朝早く予定の隊形で支社を出発、お互いの間隔をつめ、中の列の子供の手をしっかり握りしめて、吉林駅へ向かった沿道は黒山の人ばかり、すきあらば掠奪とねらっている。やがて一か所襲われると、そこへ巡警が走る。その虚をついて暴民が襲う。

駅には空車が待っていて、すぐに乗車ができて列車が動きだし、安心と思う間も無く突然鉄道警護隊員が五、六人入りこんできて、これから所持品を検査する

と称し、リュック手提袋を片っ端から調べだした。そして彼等のほしい物は有無も云わず、彼等持参の麻袋へ放りこむ。取るものを取り終ると、やおら声高にわれわれはこれより新京迄皆さんを護衛していくから心配することはないと云う、泥棒が用心棒に早がわりした。

九月十日新京へ着いた、ここは治安もよく、吉林とはようすが違う。本社の扇芳寮まで歩いて行ったが、危険は感じなかった。奥地から月を追ってぞくぞくたどり着く社員も多くなつた。ここで越冬となる。着のみ着のまま着替えもないドラムカンのストープを囲んで、シラミ取り、熱湯をかければ全滅だが、厳冬で乾くまでの間が困る。表を返し裏を返しても取りつくせずあきらめる。

子供はもちろん、大人も栄養失調に発疹チフス、寮の広間は雑魚寝の病室と変り、昨日何人、今日また何人、扇芳寮の庭は墓地凍土をツルハシで掘り、髪爪が遺品。毎日埋葬が続く。敵地の中の敗者の惨めさは言語に絶する。両親の遺髪を入れた箱を首にかけ、同県

人につれられ、未だ見ぬ故国に帰る孤児の姿が今も眼底に焼きついて忘れられない。

新京から酷暑の無蓋車でコロ島へ。待っていたのが浅間丸で病院船、ようやく日本の長崎へ上陸、郷里新潟へ帰ったが生家には台湾より引揚げの一家四人、上海よりの引揚げ四人、私の家族三人計十一人の人口増が食糧事情の悪い最中実家も大変だったと思う。歩兵十六連隊あとの兵舎が引揚者のアヤメ寮となり家族と共に入ったが引揚げ後の生活苦が、待っていたのである。

思い出の逃避行

富山県 堀 義雄

私は昭和十三年に創設された満蒙開拓青少年義勇軍に満十四歳で志願した。満州の地に入った第一の思い出は、私たちの乗っていた列車が、匪賊に襲撃をうけ、そのため、関東軍の兵隊が二人戦死し、血に染まって担架で私たちといっしょに牡丹江省の東京城駅に下車

したことです。

義勇軍の第一歩として入所したところが寧安訓練所、広い原野にアンペラ小屋が四、五棟建てられた、井戸も便所も無い場所。翌日から大陸の冬に備えて、私たちが訓練生の手により、毎日が自分たちの入る宿舍造り。冬に向けて、飲料水の不足、アメーバ赤痢、ホームシック、食糧不足、匪賊の恐怖に耐えながら寒い冬を過ごす。

浜江省平陽訓練所に翌十四年に移動、ここは、この地が訓練終了と共に開拓団に移行、本格的に理想郷の建設へと胸ふくらませ、各団員の家屋も建築され、十八年ごろから年長組が嫁を迎える者も出て、私も二十年四月に妻を迎え、食糧増産へと努力していたが、妻と一緒に暮した一か月余りで召集され、平陽開拓団の男子はほとんど全員が八月五日までに召集された。終戦時は幹部の井久保陽作、福山博の両先生の他は男子は四、五人と、あとは妻を含め婦女子四十数人がいたとか。

私は満州国境の綏西に入隊した。八月八日からソ連